

平成七年四月十六日 和敬塾入塾式記念講演

「知的野蛮人たれ」

本日のテーマは「知的野蛮人たれ」という内容であります。私は君たちが生まれる以前、一九六三年に、世界最高の福祉国家、北欧のスウェーデンのストックホルムに最初に留学をいたしました。そこはおそらく地球上で最も美しい都だと思います。どうやったら人々が革命などの暴力的手段を用いないで、素晴らしい、豊かな、平和な国が造れるかというテーマで研究をしていましたので、喜んで行きました。

日本の大学の先生の留学先は、ほとんどが、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツです。私は、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツは勉強しておりました。特に選挙制度、議会制度の研究を徹底的にやっております、どうもイギリス、アメリカ、ドイツ、フランスだけが世界のような印象を受けたんですが、ドイツまで勉強しまして、ちょっと地図を見ましたら、その上にベネルックス（ベルギー、ネーデルラント）オランダ、ルクセンブルグがあります。その勉強もしました。もう少し北を見ましたら、

デンマーク、ノルウェー、スウェーデンがある。これは、ここまで勉強しなきゃいけないんじゃないか。私は大学時代に英語とドイツ語をやりましたから、北部ゲルマン語に相当しますスウェーデン語を少しづつ勉強いたしました。そしてスウェーデンで、連立内閣を安定させるためには比例代表制がいいのではないか、連立内閣と比例代表制が豊かな福祉国家を造る時にどれだけ大きな政治的影響力があるかという勉強を始めたわけであります。

ところで、私が明治大学のラグビー部長になりましたのは今から十一年前ですが、それまでのある期間、明大ラグビー部は早稲田大学に分割がよくなかったのです。毎年十二月の第一日曜日午後二時、国立競技場。これは早稲田と明治のラグビーの試合と決まっております。ラグビーというのには非常に興味深いスポーツです。当時私は大変暇でした。政治経済学部教授以外、なんにもやらなくてよかったです。そこで、毎週テレビに出て、新聞やラジオにも政治

明治大学学長 岡野加穂留先生

に関する自分の見解を発表しておりました。ちよつと前に早稲田大学の客員教授を辞めましたが、明大の専任教授をやりながら、早稲田大学の政経学部で政治学を教えておりました。午前中、早稲田大学で教えて、午後、早稲田から地下鉄に乗って東女（東京女子大）に行つて、終わつてから今度は井の頭線に乗りまして神田神保町まで行きまして、本務校の明大で教えておりました。暇とか余裕というのはいいもんです。今は、あまり暇がありません。

明大のラグビー部の監督は北島忠治先生で一九〇一（明治三十四）年生まれで、今年九十四才ですがお元気な方です。北島先生は私が明大の学生時代の体育実技の先生でした。その先生が十一年前に私の研究室へお見えになりました。「暇ですか？」と聞かれたので「暇です」と言いました。北島先生が「それじゃあ、明大のラグビー部長になつてくれないか」と言われましたので、引き受けたわけです。その年から明大が勝ち出します。なぜ勝つかという話は、

多少企業秘密になりますので、これは言えませ
ん。早稲田の総長の奥島先生という方が私のあ
とに早稲田のラグビー部長になりました。不思
議に、今、明治と早稲田のトップはラグビー部
長出身です。で、奥島先生が「どうも明治に勝
てない」と言うわけです。それは、勝てない理
由があるんです。で、今日はその話じゃないん
です。

ちよつと秘密の話しましょうかねえ。今、自
由民主党で、幹事長をやっている森喜朗さん、
通常、「もりきろう」と言ってますが、この人
は早稲田大学の商学部出身です。選挙区は石
川県で、小松空港という飛行場がありますが、
その近くが森さんの選挙区です。で、私の弟は
早稲田の政治経済学部の出身です。小松雅夫ゼ
ミ、政経学部長の後に、今埼玉県の麗澤大学の
国際経済学部長で、小松ゼミの出身です。私の
弟は早稲田の政経で、私が早稲田大学の政経学
部の客員教授をやっていた関係で、森さんは私
に親近感を持っています。ところが私がラグビー
部長になってから、早稲田が負け出し、明治が
勝ち出したもんですから、森さんはどうも気分
が良くないんです。私が今から三年前に明大の
学長になりました時に、「先生、おめでどうご
ざいます」というわけで、「いや、どうも」と
言ったら、「おめでどうはどつでもいいんです」
こう、言ったんです。「学長になったら、ラグ

ビー部長を辞めるんでしょうね」と言うから、
「辞めます」と言ったんです。「いよいよ、早
稲田の天下だ」というわけで、「なんですか？」
と聞きましたら、「岡野先生が明大のラグビー
部長である限り、早稲田の勝ち目はなし」と、
言うんです。「それは事実だ」と言ったんです。
「ええ、学長になるとラグビー部長は辞めま
す」と。そしたら「いよいよ早稲田だ！」と、
こういうふう三年前に言われたわけです。と
ころが勝てないんです。

一九九四年の八月に、明大の政経学部の私の
五期先輩の村山富市さんが総理大臣になった
もんですから、私は村山さんに、「緊張の連続
でしょうから、十二月の第一日曜日に早稲田と
のラグビーの応援に行きませんか？」とお誘い
をしたんです。十一月の初め頃に森喜朗幹事長
から、「明治との試合に、我が方は河野外務大
臣と私が行く」と。二人とも早稲田です。「明
治は総理大臣をどうぞ」とこう言いますから、
向こうが二人で、総理大臣一人じゃ不公平なも
んですから、武村大蔵大臣がいます。東京大学
出身ですが、衆議院議員になる前に滋賀県の知
事をやりました。滋賀県の知事、兼、滋賀県
ラグビー協会会長と書いてあるわけで、私は政
治改革フォーラムの代表幹事をしていて、その
時によく武村衆議院議員が来たもんですから、
知らない仲ではないので、明治側に村山さんと

大蔵大臣、早稲田側に外務大臣と自民党の幹事
長に座ってもらって、その隣に早稲田の総長が
座って、こつちに私が座ったわけです。森さん
がうるさいんです。あの人は非常に明るい。人
間は明るくなきゃだめですよ。陰性な人間はリ
ーダーになれません。明るい人間じゃなきゃい
けません。始まった途端に「今日はなんて言っ
たって早稲田の勝利だ」と言うわけで、明治が
早稲田陣営で反則を犯したもんですから、ペナ
ルティーのキックを早稲田に与えられた。蹴る
と三点入るわけです。最初に早稲田が三点入れ
たんです。森さんが大喜び。「今日はなんと
言ったって早稲田の勝利だ！」と。で、村山さん
が私の方をニコニコ見てるわけで、私は「森さ
んの解説は政治問題はともかくとして、ラグビ
ーに関しては全然当たらないから、総理、信用
しちゃいけない」と言ったんです。そしたら、
河野外務大臣が「おい、森さん、学長があんな
こと言ってる。いいのか？」に、「いや、学長
は黙ってなさい。あなたはラグビー部長やって
たけども、ラグビーには関係ない」と、こんな
ことを言うんですね。二、三発、プレスキック
が確かに入りました。明大は入らないんです。
明治大学のラグビーっていうのは大体後半か
ら強くなるんです。暖気運動を十分しなきゃあ
動かない。ここが早稲田と若干違う。だんだん
と、明治が点数が多くなってくるもんですから、

森さんが静かになっちゃった。私は多少気の毒になりました、いつもラグビーの時にはポケットに飴を入れてるわけです。それで私はさっと立ち上がった。そしたら、私が急に立ち上がったもんですから、身辺警護のSPも立ち上がった、何事かと思っただけでしょうね。私はまず早稲田大学の総長の奥島さんのところへ行つて、「飴です」と飴を渡したんです。森幹事長に、「飴です」と言っただけです。そしたら森さんが、「学長、なんですか、飴は」と言うから、「ビスマルクじゃないけれども、飴と鞭だ」と言っただけです。そしたら、村山さんがニヤツと笑いました。一八七八年ですね、「いやな奴だよ、ビスマルク」というように、皆さん世界史で覚えてると思いますけれども、ソシアリステン・ゲゼツツ、これは社会主義者鎮圧法というのを作って、片方で福祉をやつて、片方で弾圧をする、飴と鞭ですね。そのビスマルクを真似てやったわけです。

私はラグビーとは非常に深い関係があります。私の恩師の北島先生は、私が学長になる時に「明大のラグビー部をこれだけの雰囲気を持つていったんだから、辞められては困る」と、名誉ラグビー部長という称号をくださって、辞める時には紫紺と白の正規のラグビージャージを作ってくれまして、永久欠番として七〇番

という番号をいただいたわけです。

ラグビー部長になる以前、スウェーデンで研究生を送っている時、私は夏のふた月期間がありましたので、イギリスに行きました。イギリスというのは正確ではありません。イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドがありますから、英国のことをしゃべる時には、そのどこへ行つたかと言わなきゃいけません。私はイングランドに行きました。専門は比較政治学でして、ちょうどその少し前に『内閣総理大臣』という本を書いておりましたので、英国で一番内閣総理大臣を出した学校にちよつと行きたいと思ひまして、ロンドンからテムズ川を遡りまして、イートン・カレッジというパブリック・スクールに行きました。これは、一番たくさん総理大臣を出しているカレッジです。テムズ川の東側にイートンという町があつて、そこにカレッジがあります。テムズ川の上流の西の方には、エリザベス女王の夏の宮殿のウィンザー城があります。私は午後そのカレッジに着いて、座つておりましたら、学生がラグビーフットボールのボールを持って芝生にうわーと出てきました。いよいよこれは本場のカレッジの学生のフットボールが見られると思つて、私はサンドイッチを広げてコートに立って、ソフトを目深にかぶつてずつと日射しの中でそれを見ていました。見渡したと

ころ、芝生に座つてるのは私一人でした。

ビルディングから一人の先生がガウンを着て、本を持って出てきましたが、私が座つてのを目ざとく見つけて、私のところへ歩いてきて隣へ座りました。鼻血出したり、タックルしたり、目の前で始まりましたから、私は「Rugby football is a intelligent barbarian's sports!」と言いました。intelligent barbarian's sports 知的野蛮人のスポーツだと。すると、その先生が「ああ、いい言葉ですね」と言つたわけです。それで私は、日本へ帰つたらこのタイトルのついた本を書こうと思つて、『知的野蛮人のすすめ』（講談社）という本を出しました。今、現代文明の中で、「頭は intelligent、体は barbarian」という人間の生き方が一番必要ではないかと私は思っています。「それでは、あなたはどのようなスポーツをやつたのか」とよく聞かれますが、私はラグビーはやっておりません。小学校に入る前の年から現在まで、剣道をやつております。旧制中学時代に対抗試合に勝つて、私の恩師が水戸東武館の出身でしたから水戸東武館に剣道留学というのをさせてもらいました。柳沼長治といひまして、最後は剣道九段で亡くなった先生です。非常に上段のきれいな先生で、パツと構えて、美しい上段の構えでした。上段でできませんから、いつも中段でちよつと高く構える。先生が「た

まには上段に構えたらどうだ」と言われたので、「冗談ではありません」と言ったら、先生が「剣道下手だけど、洒落が上手い」と言われました。そりゃ、先生に比べれば、私はかないません。水戸でやった剣道は、北辰一刀流ですが、一番大事なことは、「間 ま」です。「あいだ」と書きます。歌舞伎では、幕のあいだと書いて、「幕間（まくあい）」と言いますけれども、「間」が大事です。剣道は初段・二段まではちっともわかりませんでしたけれども、三段から四段になる頃になりますと、構えてみると、「これは僕より強いかなあ。そうだなあ、やり方によつては取れるかな」ということがわかるようになります。初段、二段まではわかりませんでした。やつぱり三段、四段が一番動きがいいです。それで構えてみて、「これはかなわない」と思うと、下がってきます。間がずーっと開いてきます。これを「間抜け」と言います。どうしても相手を打つためには間を縮めていかなければいけません。間を縮めていく、間を縮めるのを「間じめ（真じめ）」と言います。北辰一刀流で「間抜け」と「間じめ」というのを習いました。これは非常に大事なことです。

それから剣道の場合には、ある段階までは体力で勝負ができますけれども、体力を超えますと最後は気力になります。ですから「体力は有限だけれども気力は無限だ」と言われておりましてけれども、人間は気力があればできないことではない、人間というのは気力があれば必ずできると私は考えております。

いつぞや、東京の中国大使館の外交官が、「中国にラグビーがないので、是非中国にラグビーを普及させたいから、ラグビーチームを連れてきてくれませんか」という申し入れがありました。その時、中国の政治問題についてもいろいろ意見を交換しましたが、こういうデータを聞いてびっくりしました。

中国は一分間に子供が三十三人生まれてるそうです。一日に赤ちゃんが四七、五二〇人生まれることになりました。毎年中国は一、七三〇万人、東京都と神奈川県をつけた人口が増えるということは、大変な数です。ですから二十一世紀は中国の時代だと通常言われておりますけれども、人口を見ても言えることです。

最近の国際連合の統計を見ますと、八億五千万人の地球上の人が絶対的に貧しい状態の中で生きている。七億三千万人が重症の栄養失調患者、五億七千万人が文盲、全く水道のない所に住んでいる人が十二億四千万人いるというデータがあります。西アフリカでは、食料がないために、一時間につき千八百人ずつ子供が現に死んでいます。にもかかわらず、東京都は毎日、残飯がおよそ四十万人食分ずつ捨てられるそうです。もったいない話です。東京都だけで

四十万人分の残飯を捨てているが、西アフリカでは、食料がないために毎時千八百人ずつ子供が死んでいるということを我々は深刻に考えなければいけない。そこで、皆さんが是非とも考える方程式を頭に入れなければいけないということになります。

今年（一九九五年）になりました、嫌なことばかりが続いております。私は一月十七日、仕事でロンドンにりましたが、朝、CNNのニュースをひねりましたら、神戸の地震を知りました。この地震から始まって、何か非常に不穏な感じがずっといたしております。これを、社会科学に言いますと、突然襲う激動とか、予想もしなかったような社会的な大きな変動、暴動というものは、既成の政治経済や社会のシステムが衰退して、新しい文明に生まれ変わるための過渡的状況の中で生じた諸事件、もう少し学問的に言えば、新しい文明に対応して政治権力、社会権力、経済権力を再び系列化するための動きというものが社会現象として現われているということになります。

今、地球的規模で、日本も含めて、政治的遺産の組み替えが行なわれている時期です。この遺産の組み替えは何も自然科学だけではなくて、政治や経済や社会や文化でも頻繁にこれから使われる内容だということになります。皆さんは伝統ある大学にそれぞれ入学をさ

れて、二十一世紀の中ごろまで活躍をする社会的使命を持っておりまゝ。そのためには、二十世紀になお存在意義のあることを想定しながら、二十一世紀にどうやって自分たちは活躍をしなければいけないのかという発想を持たなければいけません。そのために一番大事なことは、世間で通用する考え方を身につけるということだと思います。

五千円札の肖像画がありますが、五千円札の新渡戸稲造先生を頭に描いて下さい。新渡戸先生は、札幌農学校でクラーク博士に習った一人です。「Boys be ambitious」という言葉は、非常に有名ですから誰でも知っておりますが、クラーク博士は「Boys be ambitious for what a man ought to be」という言葉をしゃべっております。「for what a man ought to be」この言葉に新渡戸先生は非常に触発をされました。どうも、Dr.クラークの英語を翻訳できなかった人が、この「Boys be ambitious」だけ訳したんじゃないかと私は思います。「ambitious」というのは、非常にいろんな意味が含まれています。例えば、discussion という言葉があります。discussion という言葉は、君たちが受験の場合には、討論、話し合いという意味でとっておりまゝすけれども、元来 discussion のもとになる discuss という動詞は、「時間をかけて味わう」という意味が本当の意味です。「討論」と簡単

に訳しておりますけれども、一つの結論に持ってくるまで、時間をたっぷりかけて内容を味わうというのが「discuss」の discuss になるわけです。どうも日本の言葉というのは誤訳が多すぎると思います。討論と言いますと、discussion の意味が変わってまいります。

新渡戸先生は札幌農学校を出て、東京帝国大学の前身の学校を出て、それからジョーンズ・ホプキンス大学に留学をしております。私はこの大学の客員教授をやっております。私はこのジョーンズ・ホプキンス大学は、私は日本流の言葉が好きではありませんが、日本流に言いますと、超一流の名門大学です。アメリカでは伝統大学とは言いますけれども、日本式のそういう言葉は使いません。クエーカー教徒である Mr. ジョンズ・ホプキンスが自分の全財産をなげうってアメリカのメリーランド州に造ったのが、このジョーンズ・ホプキンス大学です。現在、学生総数八千人、学部が四千人と大学院が四千人です。そしてここを出てノーベル賞をとった人が今日まで十八名、現在現職のノーベル賞受賞者があります。ここで新渡戸先生は勉強いたしました。そして、メリーさんというペンシルバニア州のフィラデルフィア出身の素敵なアメリカの女性と結婚しました。この女性がクエーカー教徒です。

クエーカーというのは、ジョージ・フォック

スという人がクロムウェル革命時代にイギリスで起こしました。ピューリタンの一派です。キリストの言われた言葉を沈黙しながら一生懸命頭の中に描いてた時に、言葉の意味に感動して、自然に体が揺れてきたんです。揺れるのを quake と言います。地震は earth quake と言います。外から見た人が「なんだ、揺れてるじゃないか、ああ、quaker だ」というので、クエーカーという名前がつけました。正しくは、Religious society of friends フレンド会といいます。新渡戸先生は奥さんがクエーカー教徒だったのでクエーカーになる、彼の平和主義運動はそういう根拠があるということです。新渡戸先生はその影響を受けました。

そしてドクター号をとって日本へ帰ってきました。その前後にドクター号をとったのが、ウッドロー・ウィルソンです。彼は第一次世界大戦後アメリカ大統領になり、エール大学の政治学の教授として、平和のためには国際連盟をつくらなければいけないと考えて、自分と同じ大学でドクター号をとった日本の新渡戸稲造博士を国際連盟の事務局次長に推薦をしたという経緯があります。

この新渡戸先生が、旧制第一高等学校の校長の時に、入学式で次のようなスピーチをしています。「人生にとって大事なことは、専門センスではなくて、common sense である」。新渡

戸先生が「専門センスではなくて common sense が大事だ」という洒落を言ったわけです。洒落ばかりではなくて、顔に似合わぬ、ずいぶん駄洒落を言った先生だったそうです。

「common sense」という言葉は、君達が受験の時に使った辞典を見ますと、「常識」と書いてありますが、これだけでは間違いです。

common sense の common というのは、キリスト教精神に従って、「人は生まれながらにしてみんな平等だ、みんな自由だ、学歴とかそんなことは関係ない、神様の前ではみんな平等だ」ということです。そういう考え方を common sense といいます。だから common sense という言葉は、本当は根底に Christianity というものがなければ使えないんです。これが常識だと言った時にはじめて常識という言葉が使えるわけです。私は common sense という言葉を非常に大事にいたします。

私は学生時代に、学生運動をやりました。ただし暴力はふるいませんでした。大学時代に社会主義国家というと、ソビエトと中国だけだと私は大学で習いました。社会主義理論というと、マルクス・レーニンだけだと習ったんです。そういう先生が当時いっぱいいました。新渡戸先生に習った私の伯父は、英国労働党やドイツ社民党の研究をやっていました。当時、毎日新聞の東京本社で政治部長をやっておりました伯

父に、「明治大学でこういう話を先生から聞いたけど」と言いましたら、「そういう考え方もあるけれど、革命をやらなくて、ゆつくりと漸進的にやっていく方法もあるんだ」と教えてくれたわけですね。私は伯父から聞いたことが、非常に頭の中にしみ込んでおりました。

私の伯父は、河合栄治郎という先生に影響を受けました。河合先生はイギリス労働党の研究者でもあります。東京帝国大学時代の経済学部長です。先生の『トーマス・ヒルグリーンの思想体系』という本を読んで、議会を通してやる社会主義もあるということに影響を受けました。そして、私は英国労働党、ドイツ社民党、スイス労働党、デンマーク社民党、ノルウェー労働党、スウェーデン社会民主労働党の研究に進んでいきました。スウェーデンの研究はそういう経緯があったのです。それで私は、「どうもマルクス一色っていうのは変だ」という疑問を持ちました。

大学を出た時に、伯父がこう言いました。「これから日本の為に働かなきゃいけないので、人生は八十年、九十年の設計をしない。この際一、二年たいしたことない。だいたい学生運動でくたびれるから、少しお寺にいつて勉強したらどうだ」と言うので、北陸の禅寺へ行った。明治大学を出て突然、学生運動から雲水の生活になった。全く訳のわからない道元禅師の『正

法眼蔵』を読まされた。全然分かりませんでした。年とってから分かるようになりましたが、わかんないままやらされました。朝四時にたたき起こされて、座禅やって、作務（決められたスケジュール）をやりました。トイレに入るにも、食事をするにもマナーがある。しゃべってはいけない。朝から晩まで座禅です。そうやって一年間やってみました。こんな世界があるのかと思つて非常に勉強になりました。剣道と禅、これは非常によかったです。

私はそういうような経験を積んでまいりました。

これからの日本の政治・社会というものを考えていく時に、どのような価値観で物事を見ていったらいいのかというようにことを考えていかなければいけないと思っております。

皆さんが、大学にお入りになる時に、日本の歴史を研究されたと思います。日本の歴史は一八六八年に幕藩制封建体制が倒れて、絶対主義の明治国家になって、天皇を中心とする国家を造ってきたわけです。とにかく天皇や軍隊や官僚が目指す方向・目的を貫徹する形の教育が進んでまいりました。ところが、これは民主的な教育と全く違っております。民主的教育にとつて一番大事なことは、目的貫徹もさることながら、目的創造ということだろうと思えます。例えば日本の軍隊は与えられた目的を貫徹す

るために遮二無二いろんなことをやっています。君達の受験もそれに近いと思います。和敬塾という立派な教育理想を持ったこの塾に皆さんがお入りになるためには、どうしても東京の大学に入らなきゃいけない。その目的を貫徹するために遮二無二突き進んできましたけれども、今日この塾に入った以後は、目的貫徹ということよりも目的創造というところに目を向けなければいけないと思います。

私は目的貫徹の人間よりも、目的創造型の人間になるということをご皆さんにお勧めしたい。目的創造ということは、集団的思い込みから遠ざかるということです。ここに百人の人がいましたら、百人の人はそれぞれみんな違った考え方を持たなくてはならない。みんな同じ考え方を持ってはけません。一般社会で生きる時には、目的貫徹は一応置いておいて、目的創造の人間形成ということをご考えなきゃいけない。

それではどういふふうにものを考えたらいいのか、十人十色という言葉があります。そのためにはいろいろな考え方をしなければいけない。目的貫徹というのは、一本の線ですつながります。皆さんの中にはいろんな大学があり、それぞれの大学に伝統があります。これは、縦の系列になります。それはそれでいいんですが、一番大事なことは、横に広がる幅広い人道主義

的な平等な人間関係の発想というものをとっていかなければいけません。横に広がるのが大事です。そういう発想を私共は持たなければいけない。そして、そのためには歴史的な認識をしっかりと頭の中にたたき込んでいく必要があるかと私は思います。

私はジョンズ・ホプキンス大学の客員教授をやっております時に、一体この大学はどういう大学なのかということをごまず研究いたしました。私は戦争前の生まれですが、日本が負けた時、私は東京府立のナンバースクールの学生でした。ちょうど君達と同じぐらいの時に、東条内閣時代の学徒動員令で、東京の深川にある日立製作所で爆弾を作っております。ところが食料不足と栄養失調で体をこわしました。当時東京の築地に、聖路加国際病院 *St. Lukes International Hospital* というのがありました。

今は聖路加国際病院とっておりますが、戦争中ですから名称を、大東亜中央病院なんて変な名前に変えちゃったわけです。その院長の橋本先生が私の父の友達でした。そこで父が橋本博士の所へ私を連れて行って、診断してもらいました。すると先生が「だいぶ痩せてるけれども、当分持ちそうだ。将来、日本を背負って立つ若者の一人だ。東京のど真ん中にいたら、アメリカの飛行機の爆弾で死んじゃうから、どこか田舎がないか」と私の父に相談しました。私の父

が、「青森県の七戸のお城の中に親戚が住んでるから、どうだろう」と言うので、「ああ、青森県の七戸なら、まだアメリカ空軍の爆撃は大丈夫だろう。まもなく戦争に負ける。こういう若者が日本にとって大事だから東京にいたら危ない。俺がにせ診断書を書くから、そっちへ、せがれをやらないか」と言って、にせ診断書を校長先生の所へ持っていた。校長先生が「大変な病気だ。それじゃ、行っていい」と言うので、私はすぐリュックサック背負って青森県の三沢の駅で降りて、それから七戸のお城の中に親戚がありますから、そこで体を癒して、戦争に負ける直前に東京へ帰ってきました。橋本先生に挨拶したら、「命が助かって良かったよ。あの辺は、みんなやられちゃった。僕は日本の大学を出たあと、アメリカの医学で世界的に有名なジョンズ・ホプキンス大学に留学した。そこで博士号を取って、内科学の専門家として日本に帰ってきて、この聖路加国際病院を作った院長に会ったら、すぐ採用が決まった。アメリカというのは実にはかでかい、大きな国で、『風と共に去りぬ』という映画が一九三六年に作られている」。その時、日本には天然色映画がなかった。その頃の映画というと、嵐寛十郎が鞍馬天狗をやっていました。大河内伝次郎というのがいました。君達のお祖父さんの世代の話です。日本にカラー映画のない時にアメリカは

『風と共に去りぬ』というカラー映画をやっていました。「日本は勝つはずがないということ、僕はジョンズ・ホプキンス大学の医学部で勉強したからわかっている。国力が違いすぎる。若い者がこれから日本の将来を背負って立つんだから、東京にいたら皆殺しになるから、俺は君の親父に頼まれてにせ診断書を書いたんだ。助かってよかったじゃないか」という先生の話聞いた。私は、世界が広いんだということ初めて知りました。

世界はものすごく広いんです。そのためには語学をしつかりやらなくては行けません。私自身は英語とドイツ語とそれだけではだめですから、アテネ・フランセへ夜通ってフランス語を勉強しました。明治大学を出る時には、英語とドイツ語とフランス語は一応読めるようになりまして。語学はきちんとやんなきゃいけませんよ。

これからは中国語です。二十一世紀は中国の時代です。今、国際会議へ行きますと、六人に一人が中国人ですが、二十一世紀になると四人に一人が中国人になるでしょう。ほとんど中国人です。日本人は、ちよこちよこつといくらいいです。中国はたぶんその時に十四億人ぐらいになるでしょうね。語学は、よっぽどしつかりやんなきゃいけない。もう英語を外国語と思っではいけません。英語は日本語と同じです。だ

ってアメリカなんて、東京と同じように生活できるんです。

とにかく世界というのは、どんどん変わっていきます。大事なことは、目的貫徹型の人格形成ではなくて、目的創造型の人格形成になる。創造型の人間にならなきゃいけない。貫徹型はもう済んだんです。一九四五年に大日本帝国が天皇制支配体制のもとに崩れたと同じように、もう目的貫徹型の人間じゃなくて、目的創造型の人間になっていかなければいけないと思います。そのためには、次の五つのことを守っていかなきゃいけません。

一番目は、既成概念や既成の方程式にとらわれてはいけません。

二番目は、他人の影響を過度に受けてはいけません。

三番目は、無用な物はさっさと捨てる。

四番目は、苦しみから逃げないで、苦しみに立ち向かうこと。

五番目は、いつまでも自分は未完成だという哲学を持つ。これによって本物である、本流である、本筋の道を行くことができるのではないかと考えています。

私は、最初スウェーデンで勉強しました。それから、ノルウェー、デンマークに行って日本に帰ってきました。今度は、イギリスとスイスに行つて帰ってきました。それから、カンボジ

アとマレーシアとインドネシアにまいりました。最も進んだ国、続いて最も植民地で遅れてしまった国に行きました。日本に帰ってきました。そしてジョンズ・ホプキンス大学へ行きました。

私はそういう経緯から、これからの世界の進む道は、非暴力平和主義であること、戦争のない社会であること、そしてみんなが幸せに手をつないでいけるような社会にならなければいけないという考え方を、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学の教授時代に身につけました。ジョンズ・ホプキンスは、アメリカのクエーカー教徒ですが、別にその大学は宗教色はありません。戦争否定、平和主義という点ではいかなる学問もその方向に進んでいかなければいけないと考えています。

私はそういう観点から、ヨーロッパ滞在中に非常に優れた三人の政治的リーダーと親しくなりました。

一人は西ドイツの総理大臣をやりましたノーベル平和賞受賞者ウィリー・ブラント。二人目は、私より年が一つ上の非同盟・中立国スウェーデンのオラフ・パルメ内閣総理大臣。もう一人は、私より十才年下のノルウェーの内閣総理大臣のハーレム・グロー・ブルントランド。西ドイツのブラントは、ブラント委員会というのをつくり、地球上から南北の格差を無くそう

と、南北問題を国連で徹底的に研究しました。オラフ・パルメ内閣総理大臣は、平和と軍縮の為の委員会を国連につくり、軍縮と核兵器廃絶に彼は身を投げ出しました。現在も生きておりますハーレム・グロー・ブルントランドは昭和十五年生まれですが、ノルウエーの内閣総理大臣を歴任いたしました。地球上から貧しい人々を撤廃しようとする世界と開発に関する委員会をつくりまして、これらを全世界に広めました。私はスウェーデンから始まる、留学の第一歩を踏んだわけでありまして、それらの国とか政治から非常に大きな影響を彼らから受けました。

世界はもうどんなことがありまして、戦争をしてはなりません。平和でなきゃなりません。ブルントランドや、パルメや、ブルントランドというドイツ、スウェーデン、ノルウエーの総理大臣を歴任した中立平和主義の考え方が、これからの世界の中心勢力として歩いていかなければいけないのではないかと私は考えています。又、その理念を十分に研究する必要がありますね。

今日はこの素晴らしい塾にお招きをいただいで、大学生活を送ろうとする皆さんにいろいろな角度からお話をしました。これからの地球社会は、大変いろんな問題を抱えています。私もはいつまでも平和でなければなりません。その

ためには豊かな社会をつくる、豊かな社会をつくるためには、もう絶対に戦争というものがあるってほならないと考えています。

そういう観点から、我々は是非とも平和な社会をつくるためにいろいろな角度から物事を見なければなりません。

皆さんは、新しい人生の先端に立ちまして、いろいろな角度でこれから難しい社会を乗り切っていくという立場にあります。ありとあらゆる困難な問題に直面していかざるを得ないと思います。一番大事なことは、十代の時にどういう考え方、どのような目的でこれからの人生を突き進んでいったらいいのかということだと思います。

私は、北辰一刀流の剣道によって身につけたのは、「きかんぼう」という考え方です。「きかんぼう」の「き」は飢え、「かん」は寒さ、「ぼう」は乏しき、人間は「飢」と「寒」と「乏」というものに対抗できるような生き方をしなければいけない。これを英語で言いますと、「Plain Living and High Thinking」、つまり「生活は質素に、思想は高潔に」という考え方です。そういう考え方によって人生を進んでいかなければいけないのではないかと見たわけでありまして。

皆さんは、新しい人生のスタートを切るにあたりまして、いろいろな問題があります。その

時に何か人生のあるものをきちんと身につけていかなければいけないと考えております。私は、飢えと寒さと乏しきの「飢・寒・乏」という考え方を基本に生きてまいりました。皆さんもそのような発想でこれからの人生を送って見たらどうかと考えています。

いろいろな角度から皆さんにお話をする機会を持つてまいりましたけれども、日本は民主政治というものを徹底的に擁護しなければなりませんし、民主政治はこれからの政治をおくる場合の最低限の基準であろうかと思っております。私は、今日皆さんにお目にかかりまして、人間の生き方のごく一端をご説明してきたわけでありまして、その一端の生き方の中に、私は飢えと寒さと乏しき、飢寒乏、マックス・ウェバーに言わせると、禁欲倫理、自らの世俗的な欲望というものを抑えていく重要な基本的な課題になるということですが、この飢寒乏精神で送っていくことが大事ではないかと考えています。「知的野蛮人」のポイントはここにあります。

今日は、素晴らしい将来を担う皆さんにお目にかかりまして、うれしく思っております。飢えと寒さと乏しきの飢寒乏精神というものを是非ともお忘れなく、長い人生を突き進まれるように期待をいたしております。

いろいろな話をもっとたくさん申し上げた

いことがあります。これにて諸君へのプレゼントといたしたいと思います。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。